

鬼才の普通

秋山道男という大先輩がいて、もともとアンゲラ世界で名をはせたのだが、やがて超モダンな雑誌を作るかと思えば、チェッカーズの総合プロデュースなども行い、どちらが表でどちらが裏がよくわからない活躍を繰り返してきた人物なのだった。

その秋山さんがある時、といってもずいぶん前で四半世紀は経っているだろうと思うが、「いとうくんは事務所とか入ってるの？」と急に言い出したのである。私が出版社をやめて何年かしてからのことだった。秋山さんと一緒にいる機会は色々多かったから、私が自分で事務所を作ったことなどどつくに知っているだろうと思ひ、意外に思った。

秋山さんはそれまでもそれからしたことのないマジメな顔をしていた。こう言った。

「マネージャーを大事にしなよ」

まったくもって普通の言葉であった。どんな時

でも変わったことを言い出す、もしくは変わった表現で言う。秋山さんはそういう人だったから、私はあつけにとられた。

すると、大先輩はかまわず続けた。

「だいたい売れてくると裏方の苦勞を忘れて自分でなんでも出来ると思っちゃうんだよ。周囲に支えられて好きなこと出来てるってことを忘れる。それが結果、クリエーターの活動をせばめる。だからマネージャーを大事にすること」

私はたぶん、やはり普通に「はい」とだけ答えたのではないだろうか。自分でも裏方をねぎらう気持ち強い方だと思っていたが、天下の秋山道男がわざわざマジメに言い出すとなれば肝に銘じるべきなのである。

おそらくそれからこっち、私は何か裏方に不満があっても一度自分に非がないか考える。突飛なことをするためには、周囲に地道なスタッフがいなければならぬ。陰陽どちらも押さえておかねば、世界に開与が出来ない。

鬼才が普通を恐れなかったあの数分、いわば鬼才が私ごときのために裏方代表になってくれた時間を、私は大事にしたいと思っている。



1961年、東京都生まれ。早稲田大学卒業後、出版社の編集を経て、コラムニスト、小説家、演出家、ラッパー、MCなどとして多方面で活躍。1988年、小説「ノーライフキング」でデビュー。1999年「ボタニカルライフ」で講談社エッセイ賞、2013年「想像ラジオ」で野間文芸新人賞受賞。他に「ゴドーは待たれながら」(戯曲)、「文芸漫談」(奥泉光との共著、後に文庫化にあたり「小説の聖典」と改題)、「存在しない小説」など著書多数。